④国史跡 勝本城跡

長崎県壱岐市勝本町〔城山公園内〕

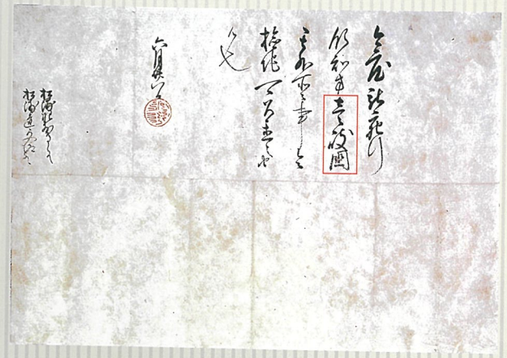
文禄・慶長の役（1592～1598年）では、豊臣秀吉が朝鮮出兵を行うにあたり、佐賀県唐津の名護屋の地に拠点となる城を構えるのと同時に朝鮮半島に渡る海上の中継地となる壱岐島と対馬島にそれぞれ出城を築く。

豊臣秀吉の命を受けて、壱岐島を治めていた松浦鎮信〔法印〕（平戸領）が中心となり、有馬晴信（南島原・日野江領）、大村喜前（大村領）、五島純玄（五島福江領）の3領主の協力を得て、4ヵ月の月日で1591（天正19）年に勝本城を完成させたと云われている。

勝本城から望む対馬島

文献史料には、1592（天正20/文禄元）年に豊臣秀吉が、羽柴秀勝と細川忠興に「風本之御座所」を建設するように命じた記録や羽柴秀勝軍兵8000名、細川忠興軍兵3500名が勝本の地に滞在した記録が記された文献史料が残る。

勝本城の完成後は、城番として豊臣秀吉の弟・秀長の家臣だった本多俊正が兵500名と共に駐屯し、朝鮮出兵が終わる1598年までその責務を果たした記録がある。



今度被宛行　領知方　壱岐国　其外所々事、
令検地可召置之由候也、天正十五年六月二八日
豊臣秀吉　朱印　　松浦肥前守（法印）とのへ　松浦道可入道との

豊臣秀吉の朱印状

〔松浦史料博物館所蔵〕

1587（天正15）年、豊臣秀吉が松浦家に対し、領地内の検地を命じた文書である。平戸領の中で唯一「壱岐国」の地名だけが名指しで記載されている。

文禄・慶長の役に向けて肥前名護屋に各武将を招集する1年以上前にこの朱印状が出されていることから、豊臣秀吉が早い段階で、壱岐島を重要視し、朝鮮出兵の兵站基地にすることを認識していたかがわかる貴重な史料である。

松浦鎮信〔法印〕の墓

松浦鎮信〔法印〕 ●1549年生～1614年没

1568（永禄11）年に先代の隆信より家督を譲り受け、第26代松浦家当主になる。1586（天正14）年には、九州平定を目指す豊臣秀吉にいち早く忠誠を誓い、島津征伐にも参戦し、信頼を得て、翌年には秀吉から朱印状を受け取り、領地安堵を賜る。

1591（天正19）年には、豊臣秀吉の命を受けて勝本の城山に勝本城を4ヶ月の月日で完成させ、長男の久信を引き連れ、小西行長の第1軍として朝鮮半島に渡り善戦する。

1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは、当初は石田三成率いる西軍に加わるも、途中で徳川家康率いる東軍に寝返るが、徳川家康の疑念を払拭することができず、建設途中だった平戸城を自ら焼き払い徳川家への忠誠を示し、初代平戸藩藩主となる。

大村喜前の墓

大村 喜前（おおむら よしあき） ●1569年生～1616年没

1587（天正15）年に純忠の死より家督を継ぎ、当主となる。キリシタン大名である父の純忠と同様に喜前自信もキリスト教を信仰し、「ドン・サンチョ」の洗礼名を持つキリシタン信徒だったが、1587（天正15）年に豊臣秀吉が発令したバテレン追放令に従い、一時棄教するもすぐに復教し、キリシタン王国づくりに邁進する。その後、長崎外町の替地問題でイエズス会と対立し、1606（慶長11）年に再び棄教し、日蓮宗に改宗する。関ヶ原の戦いにて徳川家康率いる東軍に参加し、大村藩初代藩主となり、菩提寺の本経寺を1608（慶長13）年に建立する。

五島純玄の墓

五島 純玄（ごとう すみはる） ●1562年生～1594年没

1587（天正15）年に宇久家の家督を継ぎ、豊臣秀吉の九州平定の際に五島列島を平定したことが認められ、五島福江1万5千石の所領を与えられる。

キリシタンだった19代当主宇久純堯（うくすみたか）〔洗礼名ルイス（大ルイス）〕の死後、純玄はキリシタンであった祖父純堯とは異なり、後見役の叔父盛重の薦めでキリシタンを迫害し、熱心なキリシタン信徒であった純堯の弟・玄雅〔洗礼名ルイス（小ルイス）〕を長崎に追放し20代当主となる。

純玄は1592（文禄元）年に秀吉の命で文禄の役に参加する際には名を宇久から五島に改名し、新たに五島家を確立する。文禄の役では、小西行長軍の一員として朝鮮半島に渡るものの、1594（文禄3）年に疱瘡〔天然痘〕にかかり、戦場で死去〔33歳〕。

日野江城跡

有馬 晴信（ありま はるのぶ） ●1567年生～1612年没

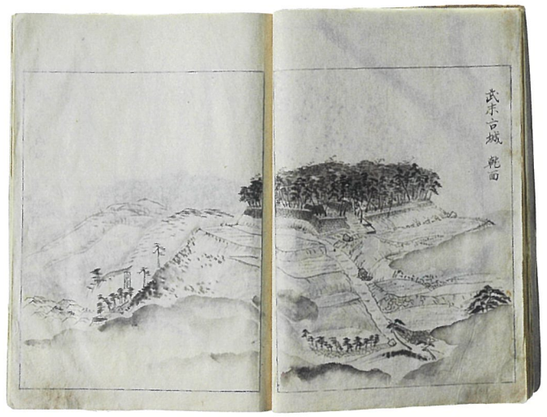
1571（元亀2）年に、家督を継ぎ、有馬家の当主となる。叔父にあたる大村純忠とともに洗礼を受けて「ドン・プロタジオ」の洗礼名を持つ信徒になりキリシタン大名としても有名である。1582（天正10）年には大友宗麟や大村純忠と共に「天正遣欧少年使節」を派遣するなどキリスト教を厚く信仰する。

1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは、当初、石田三成率いる西軍に加わるものの、途中で徳川家康率いる東軍に寝返り、小西行長の居城であった宇土城を攻撃したことが認められ、日野江藩初代藩主になるものの、のちに甲斐国〔現山梨県〕に追放され死罪となる。

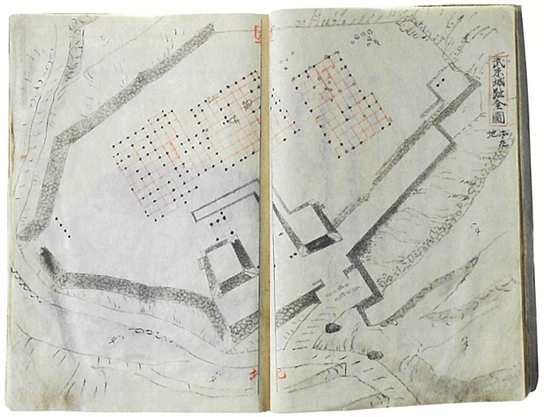
壱岐名勝図誌（いきめいしょうずし）

1850（嘉永3）年、第10代平戸藩主松浦熈（ひろむ）〔観中公〕が、後藤〔菊池〕正恒と吉野鞆千代に命じ、11年の月日をかけて「壱岐名勝図誌」〔1861（文久元）年〕を完成させた。「壱岐名勝図誌」は全25巻で構成されており、第1巻で壱岐国の伝説、郡里の事など壱岐の概要、第2巻から第25巻までは、島内にあった24村を1巻ずつ割り当て、文章だけでなく地図や挿絵などを加えわかりやすく記録しており、江戸時代後期の壱岐の様子を知る上で貴重な文献史料になっている。

勝本城跡は、巻23「可須村」に武末城として記載があり、勝本浦からみた勝本城の様子と主郭部にある御座所部分の礎石配置図が描かれている。石垣についても調査時に残っている部分は明記しているが、破却されている部分は空白で表記している。



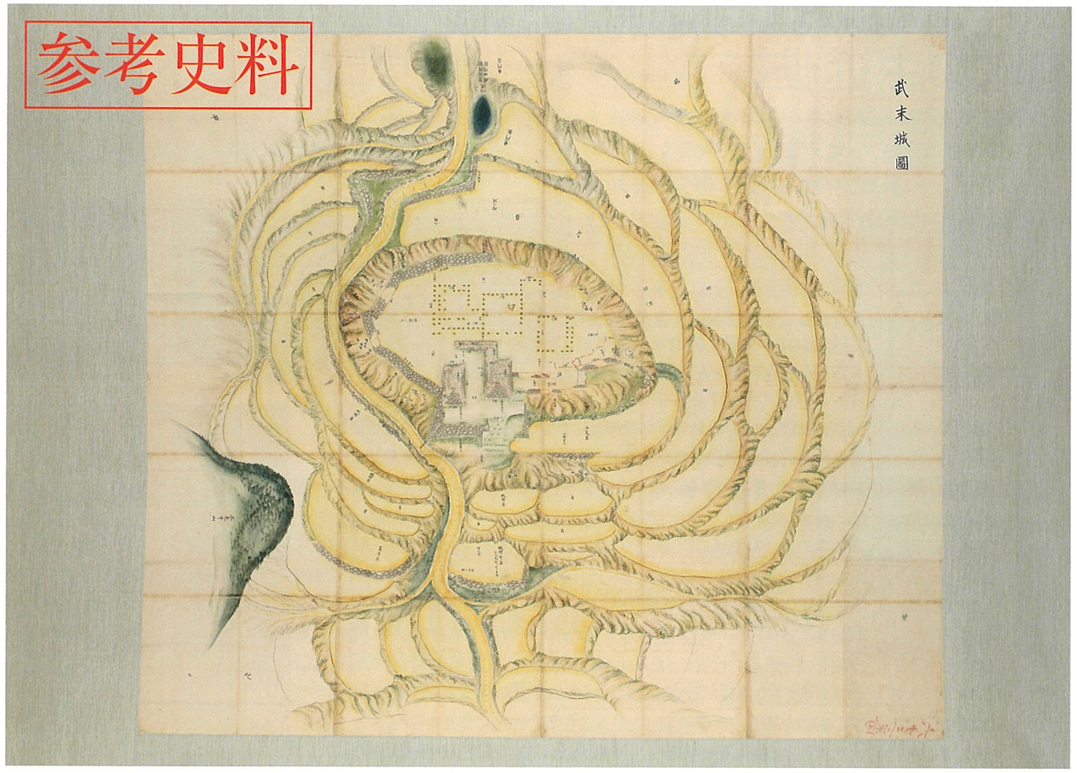
勝本城跡遠景



勝本城跡主郭部

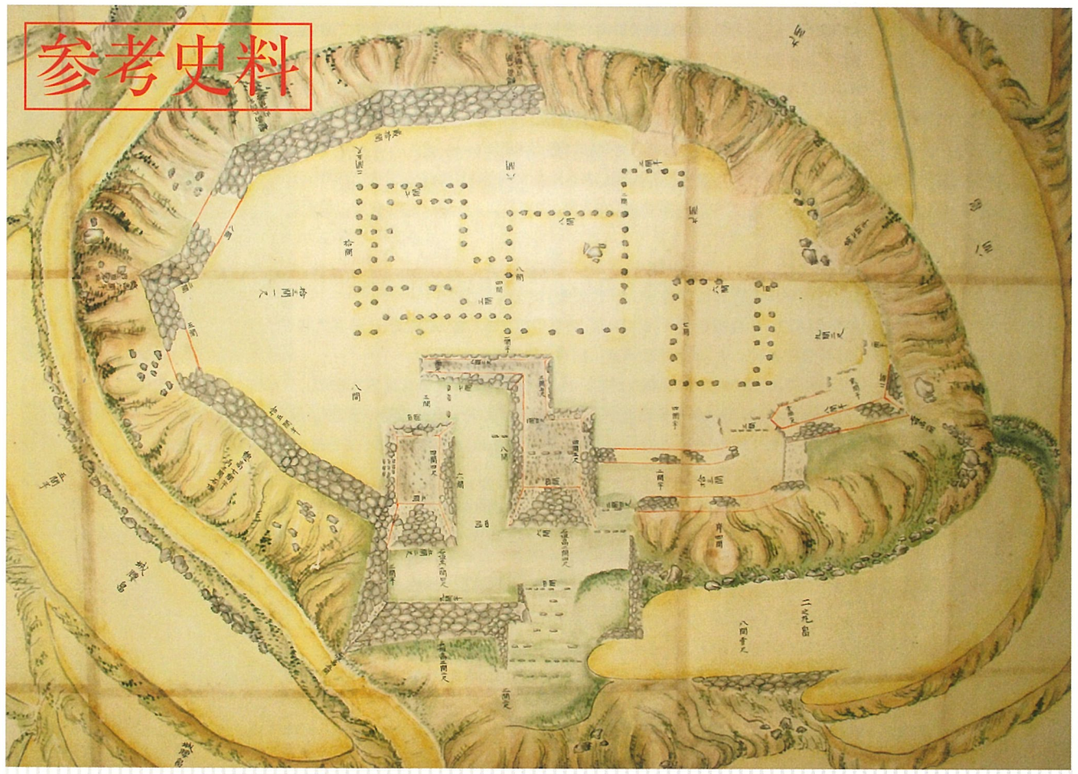
勝本城跡大手門部分

参考史料



勝本城跡全体絵図〔松浦史料博物館所蔵〕

参考史料



勝本城跡主郭部拡大〔松浦史料博物館所蔵〕